

つとむ山さね

いっ

劇団四季のオリシナル・ミュージカル「李香蘭」(企画・構成・演出―浅利慶太)は大成功だったようである。

一月の青山劇場に続いて、この三、四月には日生劇場で公演され、総入場者数六万九〇〇〇人、入場率九〇・八パーセントというから(劇団四季・広報部)、興行的には申し分のない成績であり、この秋からは長期の再演が計画されているという。

中国研究を専門とする私自身にとってはテーマからしても見逃せない作品であったが、浅利慶太氏からも是非

観てほしいと再三お招きいただいたので、私は青山劇場と日生劇場の双方の公演を觀賞した。

まさに二世を風靡した李香蘭だと言っても、今の若い世代には馴染みの薄い名前であるろうし、ご本人の山口淑子さんは実在であるばかりか、

現職の参議院議員(自民党)として活躍中である。

ミュージカル

「李香蘭」と松本高女

かにも私は関心を持っていた。だが、なんとも見どころは、

激動の昭和史のなかに投じて、日中関係史を舞台にミュージカルに仕立てるといふこと自体、ある意味では、危険な冒険なのだが、それが圧倒的な迫力で感動的に達成されてい

たように私は思う。野村玲子さん扮する李香蘭の半生がどのよう描かれるかはもとより、このミュージカルに「語り」として、また、もう一人の主人公として終始登場する川島芳子を保坂知寿さんがどのように演ずる

のオリシナル・ミュージカルに創りあげているかであった。

この点で今回の作品は、日中関係史の原点に息づいた主人公たちの夢やドラマの傷痕、そして、政治やイデオロギーの太刀によっていかに断罪されようとも、今日なお消去し得ない光と陰を照射した芸術作品として、高い評価が与えられよう。

このミュージカルには冒頭から川島芳子とともにその養父で松本出身の国士・川島浪速のことが出てきて、芳子が「信州・松本高女に通い……」という文句が歌われるので、私のような松本出身者には、

とくに印象深かった。ただ、日生劇場の公演の方は、本来の三時間という公演時間をやや短縮したために、「松本高女(現・鎌ヶ崎高校)」……という部分がカットされてしまっていた。芳子とその時代を知っている満八十二

歳の私の母を日生劇場へ同行しただけに、私にはいささか残念であった。秋の公演に備えての感想を劇団四季から先日改めて求められたので、やはりこの部分は歴史の一駒として是非復活してほしいと私は要望した次第である。だから、この秋にはもう一度観なければならぬと思っている。

(中嶋 嶺雄・東京 大外教授)